

しっかり手を加えた堆きゅう肥を施用 変化の少ない持続型管理

○Eさんは、30年以上循環型酪農と酪農の環境負荷の低減に取り組んでいます。その体系に堆肥切り返しヤードと牛尿・堆肥れき汁曝気システムがあります。

○これまで連続的な草地更新は行っていませんが、化学肥料を少なめに高温発酵した堆肥と牛尿液肥散布で高密度のチモシー主体の経年草地を維持しています。

【目的】

- ①チモシーの維持と地下茎型イネ科雑草であっても柔らかく嗜好性が良好なものを収穫すること
- ②収穫物はほぼ乾草に近く、品質的にブレ幅が少なく、安定的な飼養管理ができる収穫物を追求



経年化草地でもルートマットが薄く
表土での分解が見られる



腐熟堆肥の連続散布の効果か、前植生処理を
未実施でも異常な雑草の繁茂は無い

【取り組み内容】

○堆肥切り返しでは、一次堆肥盤からマニユアスプレッダに積載し、切り返しヤードで排出して空気を入れ込む堆積を行い初期の発酵を促進させます

その後、油圧ショベルで年間4～5回の切り返しを行い、コンポストシートで覆い管理します

○牛尿液肥は連続的な曝気と“うわずみ液”の適宜移動で、きれいな飴色に変化し不快な臭いや粘性は無くなり、微生物の菌叢が安定した状態となります

○年間10a当たり施肥量は、早春基肥の化学肥料として20～25kg、完熟堆肥1 t、牛尿1 tほど

○チモシーは株を維持するために出穂期 ⇒ 開花を迎えてから刈り倒しています

○収量は他農場と比較すると少ないですが、予乾調製など短時間で対応できるメリットとして考えています

○最近、草地更新を数十年ぶりに行っている。7月中旬のは種でヤマガラシとナズナが少し出てきたぐらいで良好